愛さずにはいられない仲間

挽地康彦 *HIKICHI Yasuhiko*

もう何年前だろうか、ある学会後に吉祥寺へ飲みに行った時の出来事を思い出す。駅の改札口を出たかと思うと、道場さんは私たちを残したまま何も言わずに一人で駆け出していった。呆気にとられていた私は、「ああいう人なんです…」と呟いたお連れ合いの麻里さんの表情をみて、田舎もんのために飲み屋を探しに行ってくれたのだと納得した。麻里さんがいなかったら、危うくこっちが彼を探しに行くところだった。

私も 40 代半ば。互いにまだこれからだと思っていた矢先に、愛さずにはいられない一人の仲間を失ってしまった。

道場さんが和光に着任したのは 2009 年の春。これまでの約 7 年間、小さな学科でずっと一緒に働いてきた。研究室もお向かいで、私たちの部屋は 8 階の一番隅にあった。大量の書籍で埋まる研究室から微かにこぼれる明かりを頼りに私は彼の在室を確認し、彼もまたそうしていた。廊下で顔を合わせれば、照れくさそうにうつむき加減で「やぁ」とだけ彼は小声で挨拶した。

私たちは院生時代に出会っているが、当時、道場さんは早稲田におり、私は九州にいた。その距離感から生まれるのか、彼の遠慮がちな佇まいがどこか心地よかった。また野添憲

治の『海を渡った開拓農民』など、私の研究関心について熱く教えてくれた世話好きのところも当時から惹かれていた。

表向きの道場さんは、一切の妥協も許さない「正義」の人として知られるだろう。あらゆる会議に出ては欠かさず発言し、議論をふっかけ、容赦なく闘う。この何とも疲れる展開を止めようとしないのが道場さんだからである。彼にとっては、それが愉しくもあったのだろう。合間に面白おかしくジョークを飛ばしていたが、相手に通じることは稀だった。学生の前でもいつも一人で笑っていた。

2015 年の秋、そんな彼がすこしスリムになっていた。2015 年は学部学科再編が本格化し、私たちの学科も試練を迎えた年。私は業務による疲労のせいだと思い込み、深刻な状態に気がつかなかった。いま思えば、道場さんはずっと痛みをおしながら学科再編に奮闘していたのだろう。自らの大学入試で和光大学を受験した頃から和光を愛し、こだわりを持ち続けてきた彼は、最後まで和光大学のために命を削っていたのである。

本当にそれでよかったのか、和光に来てなければ別の人生が待っていたんじゃないのか。悔恨の念にかられてどうしようもない。

道場さんが病状を伝えてくれた 2016 年の 1 月、彼の研究室で二人だけで話したことがある。「死ぬつもりはないから」と彼は自分を保っていたが、自分を見つめ直すように「和光に就職できて本当によかった」と涙ながらに語った。それが私にとって忘れられない言葉となった。

道場さんは生前、「麻里さんと二人でハワイに行くから」と嬉しそうに話し、私はホノルルで二人を歓迎すると約束していた。しかし、私が出発する 1 週間前に、道場さんはこの世を去ってしまった。道場さんをハワイでゆっくり休ませてあげたかった。現実を受け入れられないままハワイに来た私は、どんな風に彼に過ごしてもらうか未だに考えながら朝を迎える。そして、毎朝のように現れては消える幻想的な虹を見る。道場さんも同じ虹を眺めているはずである。あの、にんまりとした笑みを浮かべながら。

（2016 年 11 月　ホノルルより）

［ひきち　やすひこ・和光大学現代人間学部現代社会学科准教授］